

不明確項指示用法の不定語と指示詞の照応について

松本優(名古屋大学大学院生)

matsumoto.yu.f4@s.mail.nagoya-u.ac.jp

1.はじめに

現代日本語の指示詞の用法には大きく現場指示用法¹(= (1))と文脈指示用法¹(= (2))が存在する(佐久間 1951、三上 1955 等)。(1)は「これ」で指示する対象が話し手の発話の場にあり、(2)は先行する文中で指示対象が明示的である(指示対象点線)。

- (1) 「これを上げましょうか。」私は烏帽子を脱いで栄吉の頭にかぶせてやった。
(川端康成『伊豆の踊子』: 藤本 2021, p.137)

- (2) 「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べた。何のためか知らぬ。「その歌はね、茶店で聞きましたよ」
(夏目漱石『草枕』: 藤本 2021, p.138)

このうち、(2)のような文脈上で指示詞が先行詞となる名詞句と照応する文脈指示用法では、指示詞が指示する名詞句の特徴によりコソア系²で使い分けられることがわかっている。堤(2012)は、文脈指示用法においてコ(・ア)とソの言い換えについて以下の仮説を立て、データの分析から概ね正しいという結論を出している。

- (3) a. コノは Ws に登録された対象を指す。
b. ソノ³は Wp に登録された対象を指す。
(堤 2012, p.116)

ここで、Ws と Wp は話者が名詞句を指示する場合に心内で捉える「場」であり、Wp 内の要素はすべて変項であるのに対して Ws 内の要素はそうではない。つまり、ソで指示される語句は話者にとって一度は変項として解釈されている。

堤(2012)が示す(3)の仮説に従うと、(4)のように先行詞として指示詞が指示する名詞句が不定である場合には、現実世界に常に指示する対象が想定されえないということから(5)が予測できる。

- (4) 隣の部屋で何かがゴソゴソ動いている。それが生き物かどうか分からない。
(岡崎 2010, p.225)

¹ 現場指示用法と文脈指示用法については、金水(1999)では「直示/非直示」、田窪(2010)では「眼前指示/非眼前指示」という用語が用いられている。本発表では、指示詞が指示している対象の同定に言語的先行文脈が必要かという基準で「現場指示/文脈指示」を用いる。

² 現代語指示詞のみを扱う本発表では、「現代語の'ー系'」は指示代名詞・指示副詞を含んだものであり、指示代名詞または指示副詞のみで各グループが構成される古代語については'ー系列'」(岡崎 2010 : p.18)という記述に倣い、指示詞の前項要素について「系」という用語を用いる。

³ 堤(2012)の枠組みでは、主に後項要素がノ形の指示連体詞について分析している。本論では、先行研究で例として示されている(4)も踏まえて、指示代名詞も分析の対象に入れる。

(5) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞はソ系指示詞である。

本発表では、コーパスを用いた実例調査によって、この予測の妥当性について検討する。以下、2節では本論での予測(5)を導く背景の整理を行う。3節では不定語と指示詞の照応関係について実例調査を行い、その結果について考察する。4節では3節の結果に基づき(5)の予測が妥当であるか検討する。

2. 背景の整理

本発表では、(5)の予測の妥当性を検証する。この仮説の検証にあたって、(4)のように使用される不定語の解釈、また堤(2012)の仮説を援用し、仮説から導かれる予測を明確にする。

2.1. 不定語

1節(4)で見た「何か」を含む不定を表す語句全体について、尾上(1983)は「いわば空欄としてその実質を持たないというような特異な語性をもつ」(p.405)と述べる。基本的に名詞句は世界の対象物を指しその情報を聞き手に伝えるという役割を持つが、「何か」等はその実質を持たず、伝達上有効な働きをなし得ないと思われるためである。

この不定を表す語句について、先行研究では何を「不定語」とするか揺れがある。本発表では(6)(7)のような尾上(1983)の「不明確項指示用法」の不定語を対象とする。

(6)は「「何か」という部分が「不明のあるもの」という意味で何やら名詞一語のように感じられ」(尾上 1983 : p.415)、(7)に至っては格助詞が下接しているために「もはや「何か」が名詞相当になりおおせている」(尾上 1983 : p.415)と説明される。

(6) ベランダから何かぶらさがっている。 (尾上 1983, p.414)

(7) 何かがまちがっていますよ。 (尾上 1983, p.414)

以降、「不明確項指示用法の不定語」を単に「不定語」と呼ぶ。

2.2. 文脈指示用法におけるコ・ア/ソの言い換え

本発表で対象とする、不定語と指示詞の照応という言語現象において、堤(2012)の考え方を援用する。堤(2012)は、文脈指示用法における指示詞について、高橋(1956)の「場面」と「場」の考え方を援用し、コ・アとソがどのように言い換えられるか分析している。

高橋(1956)は、我々を取り巻く外的世界を「場面」、我々が心の中に作り上げる世界を「場」とし⁴、「言語體系に組み入れられるものは「場」であって「場面」ではない」(p.54)と述べる。言語的な素材が話し手から聞き手にわたるとき、「場面」に存在する素材は「場」を経

⁴ これは、心理学の用語に即して「話し手と聞き手と素材の緊張関係」(p.53)である「客観的立場における場面」を「場面」、「話し手(または聞き手)の意識における自分と相手と x(=いわゆる素材)との緊張関係」(p.53)である「主體的立場における場面」を「場」と言い換えたものである。

て発言に現れる。指示詞については、話し手が自分に近づけて素材について話したときコ系が使用され、聞き手に近づけた場合ソ系が使用されると説明される。

堤(2012)は、この「場」についてさらに Ws と Wp という段階を想定しそれぞれ「場面」から格納される要素が異なると述べる。さらに「場面」は Wo とされ、外的世界から心的領域には Ws、Wp、Wo の 3 つがあるとする。これらの性質をまとめると(8)のように述べられ、聞き手の意味解釈を関連させて可視化すると図 1 のようになる。

(8) Ws, Wp

- a. Ws は話者が外界や文脈から構築する世界である。 $(\therefore Ws \neq Wo)$
- b. Wp は Ws と Wo との中間的な存在(interface)である。
- c. Wp 内の要素を介して Ws 内の要素を指示することを間接指示といい、Wp 内の要素を介さずに Ws 内の要素を指示することを直接指示という。
- d. Wp 内の要素は全て変項である。Ws 内の要素は全て変項ではない。
- e. 意味解釈は、Ws, Wp 内の要素のいずれかを用いてなされる。
- f. Ws 内から意味解釈に選び出される要素を指示的、Wp 内から選び出される要素を非指示的と呼ぶ。

(堤 2012, p.113)

堤(2012)によれば、この 3 つの領域に基づき、名詞句を指示するときには、(i) Wo から直接 Ws に登録される、(ii) Wo から Wp へ登録された後 Ws へ登録される、(iii) Wo から Wp に登録されるが Ws への登録が拒否される、という 3 つのパターンがあると論じる。そして、文脈指示におけるコ系・ア系とソ系の違いとして、コ系・ア系は Ws に登録された対象を指し、ソ系は Wp に登録された対象を指すと予測を立てる(p.116)。



図 1 (堤 2012 に加筆)

Wp 内の要素はすべて変項であり、Ws 内の要素はすべて変項でない(= (8d))。変項を導入する必要がないものの典型は固有名詞であり、指示対象がある特定の事物を指示することができない名詞句の場合は Wp 内の要素が用いられる。(9)は「嵐」という固有名詞が用いられ、この場合は上記の(i) Wo→Ws の過程を辿り Wp には登録されない。そのため、ソ系ではなくコ系が用いられる。一方で、(10)では「(太郎がトヨタで売っている)車」はそれを継続して売っていると考えられるため具体的な内容には日々の変化があると考えられる。そのため、「(太郎がトヨタで売っている)車」を変項 x と置いたまま指示することになり、過程としては(iii) Wo→Wp となる。

- (9) 嵐が解散するそうです。この/*そのグループはやっぱり歴史に残る偉大なアイドルでしたよね。

(堤 2012 をもとにした作例)

(10) 太郎はトヨタで車を売っているが、その/*この車には保険をかけなければならぬ。
(堤 2021、p.127)

2.3. 予測

以上、本発表で対象とする不定語の概要と、文脈指示用法における指示詞の言い換えについて前提を確認した。このうち、以降の議論で重要な点をまとめると以下のようになる。

- (11) a. 不定語は「空欄」としてその実質を持たないという性質を持つ。
b. 変項となる要素が登録される Wp の対象を指すとき、その指示詞はソ系指示詞である。

(11a)に再解釈を施すと、不定語は基本的に話者にとって変項として置かれる名詞句であると考えられる。これにより、(4)のように不定語をソ系指示詞が指示している用例として確認できたものをコ系指示詞に置き換えることはできないと考えられる。

- (4') 隣の部屋で何かがゴソゴソ動いている。それ/*これが生き物かどうか分からぬ
い。
(岡崎 2010、p.225 に加筆)

以上のことから、本発表では以下(12)を予測する。以降では、コーパスに基づく実例調査によってこの予測を検証していく。

- (12) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞はソ系指示詞である。

3. 用例の観察

3.1. 調査の対象

本節では、不定語と指示詞が文脈上で照応関係にある場合の指示詞の特徴を考えるためにあって、文脈上に出現した不定語と指示詞が同一の対象を表している場合の用例を収集し、実例観察によって検討する。用例データは『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』(山崎編(2014))を、『中納言』(国立国語研究所(2025))を用いて検索することによって採取する。用例採取の際には、キーに不定語とされる「何か」「誰か」「どこか」⁵、共起条件に指示詞を設定した⁶。対象とした指示詞は前接要素コ系・ソ系・ア系と後項要素ー・レ・ーコ(指

⁵ 益岡・田窪(1992)が「疑問語」(本論での「不定語」)として挙げた 7 例(だれか、どれか、なにか、どこか、どちらか、いつか、なぜか)からコーパス検索を行い用例数が多い上位 3 つを対象とした。

⁶ 代表として「何かーそれ」の検索式を以下に示す。

キー: (語彙素="何" AND 品詞 LIKE "代名詞%")

AND 後方共起: (語彙素="か" AND 品詞 LIKE "助詞-副助詞%") ON 1 WORDS FROM キー
AND 後方共起: (語彙素="其れ" AND 品詞 LIKE "代名詞%") WITHIN 10 WORDS FROM キー
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="0" AND
tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND
endOfLine="CRLF"

示代名詞)・－ノ(指示連体詞)である⁷。

形式上不定語に一致しているものの、用例数に計上しないものの代表⁸について説明する。
(13)のような、尾上(1983)の不明確項指示用法の不定語と同じ形式のものである。

(13) ただ、こんな仕合せを与えて下さった…先生に、何かご迷惑がかったら、それは
とても辛いことです。 (辻邦生『時の扉』:LBa9_00064,65610)

(13)での「何か」は、尾上(1983)が「「それが何であるか特定できないが」という意味で後続部分に対して注釈挿入的に働いている」(p.415)と述べる「疑問用法<疑タイプ>」であると考えられる。挿入句であるために格助詞が後接することはなく⁹、述語の項にはならない。(13)で「それ」が指示しているのは名詞句「ご迷惑」であると考える。

3.2. 調査結果

指示詞と不定語が同一の対象を指示していると認められる用例の数を表1に示す。

	－レ形			－ノ形			－コ形		
	これ	それ	あれ	この	その	あの	ここ	そこ	あそこ
何か	17	231	6	3	51	0	0	13	0
誰か	0	9	0	0	30	2	0	2	0
どこか	0	13	0	0	9	0	0	10	0

表1 指示詞と不定語が同一の対象を指示する用例数

不定語と同一の対象を指示する場合にはソ系指示詞が用いられることが多く、全体の9割以上を占めている。それぞれの項目から照応されている典型的な例を以下に挙げる。

(14)(「何かーそれ」)ビールを呑み、煙草を喫ってメモを執り、客と雑談をしながら、
強く何かを感じていた。それが何だかわからない。

(風間一輝『男たちは北へ』: LBd9_00033,97720)

(15)(「何かーその」)「何の病気？」と浩二は聞いた。ヤンが何か答えたが、浩二には
その病名がわからなかった。 (永倉萬治『ラスト・ワルツ』: Lbf9_00069,63390)

⁷ 指示連体詞の場合は、庵(2007)が述べるように「この/その」全体で先行詞と照応する「指定指示」と「こ/そ」の部分で照応する「代行指示」がある。本調査ではどちらの場合も同一の対象を指していると判断されれば用例数に数えた。

(i) 昨日友達とすしを食べた。この/そのすしはなかなかの味だった。(指定指示)

(ii) 昨日友達とすしを食べた。この/その味はなかなか良かった。(代行指示)

(庵 2007、p.145 に加筆)

⁸ 例示の副助詞「でも」と同義とされる「か何か」(森山 1998)や、フィラーとして用いられているものに関しても、目視で取り除いている。

⁹ ただし、不明確項指示用法の不定語であっても格助詞の省略により形式上格助詞が後接しないことは十分有り得る。そのため、本調査では後方共起条件に格助詞を設定することは行わなかつた。

(16) (「何かーそこ」)だが、新城喬子の孤独の性質は、もっと違う何かである。そこにこの作品の新鮮味もある。

(中島誠『宮部みゆきが読まれる理由』: PB29_00258,14860)

(17) (「誰かーそれ」)ここでも しだれかが殺されるとしたら、それは間違いなく五百崎だった。 (松井今朝子『家、家にあらず』: LBt9_00259,81050)

(18) (「誰かーその」) 誰かの悪口を言うと、テキメンにその人が現れる。

(青木雨彦『ことわざ雨彦流』: LBe0_00005,46220)

(19) (「誰かーそこ」)あなたがこれまでに取り引きした誰かがウイルスに感染して、そから届いています。 (『Yahoo!知恵袋』: OC02_00307,3120)

(20) (「どこかーそれ」) どこかでつまずいていては、それから先の勉強はとてもたいへんになります。 (小宮山博仁『わが子を算数大好きに変える本』: LBj3_00113,76220)

(21) (「どこかーその」)世界のどこかで紛争が起こると、必ずその国から政治亡命者が入ってきます。 (高見幸子『日本再生のルール・ブック』: PB35_00199,86950)

(22) (「どこかーそこ」)しかし、植物は動けませんし、カイメンもホヤもフジツボも、一度どこかにくっつくと、そこで一生を送ります。

(長谷川眞理子『オスとメス=性の不思議』: LBh4_00020,41150)

2節で立てた予測(12)は、以下の通りであり、上記の例はこの予測と合致している。

(12) (再掲) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞は基本的にソ系指示詞である。

しかし、表1ではコ系・ア系ともに用例数が確認できる。これは一見上記予測の反例であるかのように見えるが、表1でのコ系・ア系指示詞の用例の大半は不定語と照応関係にあるとは言えず、したがって実のところこれらの例は反例とはならない。

まず、ア系指示詞の用例についてである。(23)のようなア系指示詞の文脈指示用法について、金水(1999)は「一般に、アの文脈照応用法(=文脈指示用法)と呼ばれるものは、すべてこの記憶指示用法である」(p.72、加筆)と述べる。つまり、ア系指示詞には本質的に文脈指示用法が確認できず、文脈指示用法と見られるものもこの記憶指示用法であると考える。

(23) きのう、山田さんに会いました。あの人、変わった人ですね。 (金水 1999、p.72)

実際に、表1の用例中のア系指示詞の8例を見たところ、文脈上に先行詞が出現しているとはいえ以下のようにすべてが記憶内の要素を指示していると判断できるものであった。

(24)の例では「彼が胸をドーンとたたいてなにか言った(という記憶)」、(25)の例では「(記憶の中の)誰か」を同時に参照していると考えられる。

(24) (「何かーあれ」)彼は胸をドーンとたたいてなにか言ったんですけど、あれは任しておけって言ったんでしょうね。 (安野光雅『空想書房』: LBg9_00162,50950)

(25) (「誰かーあの」) 誰かを好きになったら、「あの人は今、何をしているのかしら。

(山田邦子『邦子の「しあわせ」哲学』: PB37_00019,36350)

続いて、コ系指示詞の例を確認する。まず表 1 で取り出した不定語と指示詞が同一の事物を指している用例 20 例のうち 15 例¹⁰は(26)のように発話された現実世界の外的な場面にある対象を指している現場指示用法の例と考えられる。

- (26) (「何かーこれ」)マリアは机の上に置いてある箱から、何かを取りだした。「これ、持つておきなさい」 (落合ゆかり『黄昏の放課後』: LBn9_00156,28570)

残りの 5 例のうち 1 例は(27)であり、先行詞も照応詞も不定語である「なにか」である。この例は、形態的に一致しているために照応関係にあると考えられ、つまりコ系指示詞と先行詞が照応関係にあるわけではないと考えられる。

- (27) (「何かーこの」) なにかを求めて—このなにかには、なにを代入してもいい。
(白田雅之・高橋満『日本とインド交流の歴史』: LBh3_00062,23100)

以上で見てきた用例以外の残り 4 例¹¹について、以下にすべての例を示す。項目としてはすべて「何かーこれ」の例である。(28)の例を観察すると、不定語である先行詞「何か」をコ系指示詞で照応しているというよりかは、前文脈の内容全体を指していると考えられる。

- (28) a. 大家さんが我々を集めて何か言うとなれば、これははどう考えても月々のもののことだと思う (清水義範『実業之日本社』: LBi9_00083,54650)
b. ドイツ人管理職が何か提案する。これが日本人社員にとっては、実情にあわないようみえたり、意図がよくわからない。

- (大島慎子『ドイツおいしい物語』: LBk3_00077,18370)
c. アウトバーンのモーベン・ピックというチェーン店で何か喰う羽目になる。ところが、これがそれほど悪くもないのだから困るんじゃ。

- (島村菜津『スローフードな人生！』: LBr5_00046,20470)
d. ニーチェの言葉をここでいくつか追加して引用しておこう。『何かを烙きつけるというのは、これを記憶に残すためである。苦痛を与えてやまないものだけが記憶に残る』 (清真人『想像の人間』としてのニーチェ): PB51_00117,47950)

(12)の予測に照らして考えると、一見(28)の 4 例は予測の反例であるかのように思えるが、これらの例において指示詞の照応先は不定語そのものではなく「大家さんが我々を集めて何か言うこと」や「ドイツ人管理職が何か提案すること」、「アウトバーンのモーベン・ピックというチェーン店で何か喰う羽目になること」、「何かを烙きつけること」であると見ることができる。つまり、先行詞となる事態に不定語が含まれているが、不定語

¹⁰ 以下の 1 例は、用例(20)のように視点の異なりが見られないため現場指示と文脈指示の判断がつきにくい用例であったが、その場面に「ノアがこっちを向いて言ったこと(音声)」は存在していると考えられるため現場指示と判断した。

(i) ノアがこっちを向いて何か言った。ヌオンが英語でこれを通訳した。
(船戸与一『週刊文春』: PM21_00494,8170)

¹¹ (28d)の例は翻訳文相当であり、コ系指示詞「これ」を許容しない母語話者も確認できた。

という名詞句自体と照応関係にあるということではないためコ系指示詞の使用も可能となると考えられる。

4. おわりに

以上の調査結果から、不定語と照応関係にある指示詞は原則ソ系であった。また、極めてまれに不定語がコ系指示詞で照応されている例も見つかったが、それらは不定語を直接照応しているわけではないためコ系も使用可能になっていると考えられる。

以上から、不定語を指示する指示詞はソ系であるという実態が明らかになった。この結果は、本論の予測が妥当であることを示す。

(29) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞はソ系指示詞である。

さらに、この結果は(循環的にはなるが)堤(2012)の仮説の傍証ともなる。また、不定語の側から見れば、本論は不定語の特徴の一端を明らかにした記述ともいえる。尾上(1983)は不定語「何か」を「名詞相当になりおおせている」(p.415)と述べているが、本論で指示詞の文脈指示用法において先行詞となる場合はソ系指示詞でのみ指示されることがわかった。少数の例外も存在するが、この結果は不定語が一般的な名詞句とは異なる名詞句であることを示唆している。つまり、不明確項指示用法の不定語は、基本的に変項を含む名詞句として解釈されるものであり、このこともまた、本研究によって改めて検証されたことになる。

調査対象

国立国語研究所(2025)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03)<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>(2025年7月22日確認)

参考文献

- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版.
- 岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房.
- 尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』pp.404-431, 明治書院.
- 金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4), pp.67-91.
- 佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法(改訂版)』厚生閣.
- 田窪行則(2010)『日本語の構造』くろしお出版.
- 高橋太郎(1956)「「場面」と「場」」『国語国文』25(9), pp.53-61.
- 堤良一(2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版.
- 藤本真理子(2021)「「日本語指示詞の指示の変容—聞き手の存在と結びついた「そ」ー」野田尚史・小田勝編『日本語の歴史的対照文法』pp.137-156, 和泉書院.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 三上章(1955)『現代語法新説』刀江書院.
- 森山卓郎(1998)「例示の副助詞「でも」と文末制約」『日本語科学』pp.86-100.